アメリカ研究における白人性の諸問題

デイヴィッド・W・ストウ
坂下　史子　訳

二十世紀の問題とは、皮膚の色の境界線の問題である。
――W. E. B.デュボイス、『黒人のたましい』（*The Souls of Black Folk*）、1903年

I．はじめに

1998年秋、アメリカ中がモニカ・ルインスキー事件に関するスター調査報告書に釘付けになっていたとき、小説家トニ・モリソンの行った主張が議論を呼ぶことになった。彼女は、ビル・クリントンがアメリカ初の黒人大統領であると述べたのである。アーカンソー州の貧しい労働者階級の母子家庭に育ち、サックス演奏とジャンクフードを好むクリントンは、当時、連邦政府の捜査官にプライバシーを侵害され、性生活を暴露される侮辱に苦しんでいた。彼は、大統領職を解任され不名誉にさらされる危機に瀕しているようだった。モリソンによれば、これらのことすべてが、クリントンを「我々の子供達の世代になって［大統領に］選ばれる可能性のある、実際の黒人よりも黒人らしく」しているというのである[1]。

デュボイスと同様、モリソンは、アメリカで進行中の人種の理論化において重要な知識人である。クリントン大統領に関する彼女の挑戦的な主張には、20世紀を的確に予言したデュボイスの有名な声明のように、カラー・ラインが21世紀のアメリカの問題をも規定し続けるのだろうかと考えさせられる。さらに、クリントンが実質的に「黒人」であるというモリソンの主張は、我々に次のような問題を提起させる。すなわち、次世紀に、カラー・ラインはどのように引かれるのだろうか、と。

この問題を分析するにあたり、本稿では、時にホワイトネス研究（whiteness studies）と呼ばれる、比較的新しい学問分野の台頭について簡単に概観したい。ホワイトネス研究は、この10年アメリカ研究の分野で、最も広く議論され影響力を持つ研究成果をいくつか生み出している。さらに、この学術動向の政治的一翼を担うNew Abolitionist Movementについて、機関誌*Race Traitor*と合わせて検討する。最後に、*Race Traitor*という比較的狭い領域から、アメリカのセンサス（国勢調査）をめぐる公的政策へと範囲を広げ、白人性の政治的意味をたどっていきたい。その際特に、2000年のセンサスに採用される予定の、人種のアイデンティティを指定する新しいカテゴリーをめぐる議論に言及する。

これらの議論に一貫しているのは、アメリカ研究という学問とアメリカの生活、両者の将来の方向性を理解するのに、こういった問題が重要だということである。白人性への強い関心は、統合主義者、反人種主義者のリベラリズムへの幻滅を示しているだけでなく、ポストモダニズムを規定する顕著な特徴の一つである流動的で構築された概念としてのアイデンティティに、人々が魅了されていることも明らかにしている。

1　Toni Morrison, "The Talk of the Town," *New Yorker,* 5 October 1998, 32.

またそれは、アメリカで予測される人口動態の変動が、市民のアイデンティティにどのような影響を及ぼし、そのアイデンティティを通じてどう屈折するかを予言するための一つの歴史的モデルを提供している。たとえ将来アメリカが非白人の国になるとしても、200年以上も同じ場所を占有してきたという特権から、やはり人種化された同様のカテゴリーによって、アメリカは統治されるのかもしれないのである。

II. ホワイトネス研究概観

はじめに、本論の主題に関連する100年前の記念すべき二つの史実に注目しておくべきだろう。ひとつは1898年、フィリピン・ハワイ併合に伴い、アメリカが太平洋における帝国主義勢力の段階に入ったことであり、もうひとつは、1896年、プレッシー対ファーガソン判決により、合法化した人種隔離というジム・クロウ制度が公認となったことである。これまでのアメリカ研究者による研究の大部分において、外交史は、まるで一方の歴史家が他方の研究を知らないか気にしていないかのように、アメリカの人種関係史とは無関係に論じられてきた。だがこういった事態は変化しつつある。アメリカの人種とエスニシティを研究する歴史家は、アメリカの有色人種に関する研究から得られた様々な洞察を、アメリカがいかに国境を越えて有色人種に関与したかという研究に適用して、今や積極的に国境を越えている。ちょうどアメリカ研究が、より大きな大西洋および太平洋文明の一部として地球規模でとらえ直されているのと同様に、外交史はいわば人種化されつつあると言えるだろう[2]。

このようなアメリカ研究へのトランスナショナルなアプローチの可能性を見抜き、提示した人物こそ、ホワイトネス研究の父と呼ぶに最もふさわしい人物でもあるW.E.B.デュボイスである。実は、これら二つの動向の起源は、彼の記念碑的研究*Black Reconstruction*に見られる。この本が出版されたのは、主流のアメリカ史研究者が、再建期の解釈において、解放黒人の怠惰、無知、好色や、南部白人の博愛を強調していた頃だった。デュボイスは、このような中傷から南北戦争後の黒人を救い出し、南部社会の真の再建を成し遂げるために、南部でプア・ホワイトと黒人の提携する機会が失われたことの悲劇を強調した。彼は、*Black Reconstruction*やその他の研究において、世界中の抑圧された有色人種の労働者から切り離して解放奴隷を見ることを拒み、アメリカの黒人の搾取を、アフリカからアジアまで含む世界中の非白人を襲う植民地的搾取という、より大きなパターンの一部としてとらえた。そして、アメリカの黒人の研究から世界中の帝国主義支配に関する洞察を引き出し、帝国主義についての観察から国内の社会状況をよりよく分析することを可能にした。同書の終わりの方で、デュボイスは、プア・ホワイトの労働者が南部の制度に忠実であることに思いを巡らせ、「労働者の白人集団は、報酬は低かったが、敬意や称号、より良質な学校や公的施設といった形で、ある種の公的、心理的な報酬によって部分的な補償を受けた」と指摘した[3]。

この「心理的な報酬（psychological wage）」という概念が、ホワイトネス研究の台頭において非常に重要となってくる。けれどもデュボイス自身の研究は、アメリカ史研究という池の中に、さざ波さえ立てずに石のように沈んでいったのである。1960年代の黒人解放運動にともなう意識変革によって、ウィンスロップ・ジョーダンやジョージ・フレデリクソンによる黒人性の重要な研究が出版されたが、これらは主流文化による黒人性の歴史研究であって、白人性の

2　この方面における最も影響力のある研究としては、Amy Kaplan and Donald E. Pease, eds., *Cultures of United States Imperialism* (Durham: Duke University Press, 1993); David Lloyd and Lisa Lowe, eds., *The Politics of Culture in the Shadow of Capital: Worlds Aligned* [*Post-Contemporary Interventions*] (Durham: Duke University Press, 1997) を参照。

3　W. E. B. DuBois, *Black Reconstruction in the United States, 1860-1880* (New York: Russell & Russell, 1935), 700-701.

研究ではなかった。デュボイスの研究から一世代以上を経てやっと、ホワイトネス研究における次の主要な転機となった、エドマンド・モーガンの*American Slavery, American Freedom*が現れた。この権威ある研究は、アメリカ人歴史家によって書かれた最も称賛された唯一の本であるといわれるが、ヴァージニア植民地のプア・ホワイトの特権が、いかに黒人を犠牲にして勝ち取られたものだったかを論証した。下層階級の白人にとって、政治、経済上の諸権利は、全黒人の奴隷化と引き換えによってのみ、プランター階層のエリートから与えられるぜいたく品だった。モーガンが言う「アメリカのパラドックス」は、自由という理想が歴史的に奴隷制度に根ざしたものであり、両者が解決不可能なほどに人種化されている事実にあるのだ。プア・ホワイトは、18世紀のバージニア州において、このファウスト的な取り決めを受け入れたが、彼らは以来ずっとそれを利用し続けている、と議論する者もいる[4]。

モーガンの研究が影響力を持っていたことはもちろんだが、白人性に関するここ10年の研究を盛んにしたのは、デュボイスの概念を受け継いだ歴史家デイヴィッド・ローディガーの研究*The Wages of Whiteness*だった。1970、80年代の多くの新労働史研究者たちとは対照的に、ローディガーは、彼の研究対象であるアメリカの労働者の人種的な姿勢を直接取り上げることにした。南北戦争以前の北部の都市労働者に注目しながら、彼は、白人性が、労働者がもぐりこめる単なる既成のアイデンティティではなかったことを示している。白人性は、アンテベラム期の急激な経済発展によって、彼らの自立が脅かされていると感じた労働者に安心させるために、試行錯誤を通じて構築されたカテゴリーだった。奴隷身分と大差がないことを脅威に感じていた白人労働者は、黒人、とりわけ彼らと混在する自由黒人から距離を置いた。そうしながら彼らは、労働市場で失いつつあると感じた好色や素朴さといった自らの資質を、黒人に投影したのである。両人種を対称させることによって、軽蔑の対象だった白人エスニック集団は、マイノリティの地位を越えて偉大なアメリカのマジョリティに参加することができた。おそらくローディガーの洞察の重要な点は、実際の人々の生きた経験の中では、人種と階級は決して分離され得ないということだろう。すなわち、社会的存在かつ賃金労働者として自分をどのように理解するかは、他の皮膚の色を持つ人々をどのように考えるかということと大いに関係しているのである。他者（Other）を定義することなしには、いかなる社会的アイデンティティも存在しない。こうして、「人種と階級どちらが重要か」という、アメリカの歴史家を悩ませつづけてきた問いは、無意味なものとなる[5]。

ローディガーの本がきっかけとなって、ホワイトネス研究は急激に隆盛となり、1990年代には数多くの研究が出現した。ノエル・イグナティエフのアイルランド系移民研究や、ローディガーの論文集*Toward the Abolition of Whiteness*のような歴史研究もあれば、トニ・モリソンの*Playing in the Dark*やエリック・ロットの*Love and Theft*のように、文学的なもの、あるいは文芸理論にかなり依拠したものもある。イアン・F・ヘイニー・ロペスの*White By Law*のように、法学研究評論の分野のものもある。大部分の研究対象はアメリカだが、中には国際的な視野を持つ研究もあり、ヴロン・ウェアの*Beyond the Pale*や、ルース・フランケンバー

4 Winthrop Jordan, *White Over Black: American Attitudes Toward the Negro, 1550-1812* (New York: Norton, 1977); George Frederickson, *The Black Image in White Mind: The Debate on Afro-American Character and Destiny, 1817-1914* (New York: Harper & Rows, 1971); Edmund S. Morgan, *American Slavery, American Freedom: The Ordeal of Colonial Virginia* (New York: Norton, 1975). モーガンの研究は、1994年にアメリカ歴史家協会（Organization of American Historians）が行った会員調査において、歴史学術研究書の中で最多票数を得た。*The Practice of American History: A Special Issue: Journal of American History* 81 (December 1994): 1206を参照。

5 David R. Roediger, *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class* (London: Verso, 1991).

グの*Displacing Whiteness*などがこれにあたる。

おそらく、近年の最も重要な研究が明らかにしているのは、ヨーロッパ移民の歴史を理解するには、非白人の歴史を理解する場合と全く同様に、人種が重要になるということだろう。マシュー・ジェイコブソンによれば、昔の人々が「ヘブライ人種」あるいは「ケルト人種」に言及したとき、それらは、歴史家が当然のことと考えていたようなエスニシティではなく、実のところ人種を意味していたのである。1790年の帰化法以降、白人性は、共和国市民にふさわしいか否かを示す比較的あいまいなカテゴリーだった。1840年代になると、移民の増加に対応して、白人種の中にも階層順序ができ、明確な「諸白人種」— ケルト、スラヴ、ヘブライ、ラテン、アングロサクソンなど — という新しい分類法が出てきて、幅広いコンセンサスを得た。1924年の移民法の頃には、この分類は科学的に権威づけられ、コケイジャン（Caucasian）というカテゴリーに統合された。そして20世紀半ばまでに、多数あった人種カテゴリーは、国民の意識の中ではただ二つになり、人種に関する言説は、もっぱら「黒人問題」に還元されたのである[6]。

歴史家は、彼らの研究から将来を推定することにはあまり乗り気ではないものだが、ここで述べた研究の大多数においてはそうではなかった。アメリカの人種に関する研究は、政治的意味合いと不可分であり、ホワイトネス研究者の間では、過去を現代的な視点で社会的に意味づける努力は、一度もあいまいにされたことがない。人種が社会的構築物だとすれば、それは脱構築され得るし、また白人性に特権のしるしとしての歴史があるならば、それには歴史的な終点もあり得るのだ。他方、白人性というカテゴリーを支持する社会的関心が、その顕著な特徴を失ったとは信じがたい。人種のカテゴリーのいくつかが永久に脱構築されたとしても、それに代わってまた別のカテゴリーが絶えず再構築されると考えるのは当然だろう。これら二つの可能性は、現代の歴史家および人種の研究者の間で激しく争っていると見ることができる。

一つのアプローチは、人種差別の主観的経験を強調するものであり、世論調査や、大衆意識および大衆文化などその他の指標から、人種差別の中核となる感情は緩和しつつあると主張している。例えば、文芸批評家のスタンレー・クローチは、はっきりと「人種は終わった」と述べている。ハーヴァード大学の社会学者オーランド・パターソンは、アメリカが人種差別を減らすのに「驚くべき」進歩を遂げていると、より体系的に論じた。彼は、「比較史、比較社会学の見地から見て無条件に言えるのは、過去50年以上にわたってアメリカで起こってきた変化が、マイノリティとマジョリティとの関係の歴史においては前代未聞だということだ」と書いている。「オランダを例外として — 小さすぎてアメリカとの有意義な比較はできないが —、

6 Noel Ignatiev, *How the Irish Became White* (New York: Routledge, 1995): David Roediger, *Towards the Abolition of Whiteness: Essays on Race, Politics, and Working Class History* (London: Verso, 1994); Toni Morrison, *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1992); Eric Lott, *Love and Theft: Blackface Minstrelsy and the American Working Class* (New York: Oxford University Press, 1993); Ian F. Hany Lopez, *White By Law: The Legal Construction of Race* (New York: New York University Press, 1996); Vron Ware, *Beyond the Pale: White Women, Racism, and History* (London: Verso, 1992); Ruth Frankenberg, ed., *Displacing Whiteness: Essays in Social and Cultural Criticism* (Durham: Duke University Press, 1997). さらに、ホワイトネス研究の論文集も出版されている。Mike Hill, ed., *Whiteness: A Critical Reader* (New York: New York University Press, 1997); Michelle Fine, Los Weis, Linda C. Powell, and L. Mun Wong, eds., *Off White: Readings on Race, Power, and Society* (New York: Routledge, 1997); Richard Delgado and Jean Stefancic, *Critical White Studies: Looking Behind the Mirror* (Phiradelphia: Temple University Press, 1997). Matthew Frye Jacobson, *Whiteness of a Different Color: European Immigrants and the Alchemy of Race* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1998).

近代あるいはそれ以前の歴史において、マイノリティ弱者に対するマジョリティの態度の変化や法的政治的諸権利の保証、社会経済的機会の拡大という点で、アメリカの成し得たことに少しでも迫るような例はどこにも存在しない。」[7] ウェンデル・フィリップスやフレデリック・ダグラスと同様、パターソンも、異人種間結婚が、人種偏見を克服する助けとしても証しとしても決定的であると信じている。

アメリカ人の結婚パターンに関するデータはこの見解を支持している。1960年から1990年の間に、異人種間結婚は800%以上も増加した。今日ではおよそ25組に1組がそうである。1960年には、このような結婚は150,000件のみ、全体の0.4%で、このうち黒人と白人の結婚は51,000件のみであった。それが1990年までには、150万組、全体の2.8%になり、1997年には黒人と白人の結婚は311,000件となった。現在アメリカには、両親の人種が異なる子供が少なくとも300万人いる。このセンサスデータを検討し、歴史家のデイヴィッド・ホリンジャーは、「1990年代のアメリカは、このように一定程度の構造的同化を見せている。これは、ドイツや日本、オランダ、ポーランドのような比較的同質の社会だけでなく、インドやベルギーのような多様な社会においてさえ、想像も及ばないことだ。」と結論づけている。結婚に関するデータを補うものはふんだんにあり、増加しつつある人種への寛容、さらには愛情などの例は枚挙にいとまがないほどである。歴史家のデイヴィッド・B・デイヴィスは次のように述べた。もし状況が、アンドリュー・ハッカーのような悲観的な社会学者が描き出すほどひどいものなら、「私がつい数日前に目撃したような、黒人と白人のペンキ屋が一緒に働き、冗談を言い合い、ラジオのポピュラー音楽に合わせて歌うというような光景は想像できるはずがないし、SATで高得点を取った黒人の学生が、アイビー・リーグの大学やほとんど白人の公立高校で最優秀学業賞をもらうことも想像できないだろう。同数の黒人と白人が一緒になって、コネティカット州郊外の白人居住地に見事なエホバの証人の教会を建てることも、他の人々と同様に順調な結婚生活を送る異人種のカップルがいることも、あるいは、都市部に住む勤勉で向上志向の黒人家庭が、何としても子供を中産階級までのぼらせようと決意を固めていることも、想像できるはずがないのだ。」[8]

人種間の不平等はアファーマティヴ・アクションのような政府の援助でなくなりつつある、と見る人々とは対照的なのが、それは頑強に存続している、ということに注目する学者たちである。彼らは、このグループの人々が分析をせずに心理学的解釈を行っていると非難する。つまり、結果としてこのグループは、白人性がそのカテゴリー内の人々に与える客観的な有形の利益を考慮することなく、感覚や感情というあまりにも主観的な領域に人種差別を位置づけてしまっているのである。「社会生活を意識的で意図的な個人行動の集積と定義するかぎり、人種主義者というのは、個人的な偏見や敵意の単なる個人的な表れに過ぎない」と、白人性への広範な「執拗な投資(possessive investment)」の検証を進めているジョージ・リプシッツは述べている。「結果的に、体系的かつ集合的で連携された行動は見えなくなる。ある集

7 Stanley Crouch, "Race Is Over," *New York Times Magazine,* 29 September 1996, 170-71; Orlando Patterson, *The Ordeal of Integration: Progress and Resentment in America's "Racial" Crisis* (New York: Counterpoint, 1997), 5.

8 "Breaking Down Barriers: Mixed-Race Couples Thrive," *Pittsburgh Post-Gazette,* 12 June 1998, A-1; Michael Lind, "The Beige and the Black," *New York Times Magazine,* 16 August 1998, 38-45; David A. Hollinger, "National Solidarity at the End of the Twentieth Century: Reflection on the United States and Liberal Nationalism," *Journal of American History* (September 1997): 566; David Bryon Davis, "The American Dilemma," *New York Review of Books,* 16 July 1992, 15. アメリカ史における人種の融合については、Michael Lind, *The Next American Nation: The New Nationalism and the Fourth American Revolution* (New York: Free Press, 1995), 289-98, 379-80を参照。

団から別の集団へ、報酬や財産、機会を容赦なく移動させる集団的な権力行使は、この観点からは『人種主義者』とは見えないだろう。なぜなら、個人を差別するという意図は、そこではほとんど公に表明されることがないからだ。それにもかかわらず、人種の異なる人々には全く違う人生の機会しか与えられないことによって、人種のアイデンティティには邪悪な社会的意味が付与されるのである。」[9] 体系的人種主義の例としては、連邦政府による白人の郊外移住の助成金や、都市再開発の一環としての低家賃の都市住宅の取り壊し、主に白人住民にのみ限定された学校その他の公共サービスへの助成金支給などが挙げられる。こうして見ると、アメリカの人種主義は、リベラル派の人々の甘言にたやすく動かされてしまうような、消えゆく心理的感情ではない。それは、たとえ利己的な行動という著しく無分別な形態であったとしても、非常に合理的な感情なのである。

III. *Race Traitor*の政治学

要するに、人種主義は、自然と弱まっていくのを待つのではなく、積極的に挑戦し、打ち壊されなければならないのである。白人性は、歴史的構築物として明らかにされてきたので、積極的に脱構築され得るのだ。しかしどのような方法で、誰によって行われるのだろうか？ホワイトネス研究者たちは、進んで様々な勧告を提供する。例えばリプシッツは、19世紀の奴隷制廃止論者ジョン・ブラウンやソジャナー・トゥルースの例を引用し、「反人種主義者を標榜するエスニシティ間の運動」を呼びかける。「社会主義者の様々な期待は、5千万人の労働者階級の黒人とラティーノに向けられているに違いない」とエリック・ロットは述べている。「彼らの闘争によって、彼らの党派の下には、信条に基づく白人が集まるだろう。」しかし、他以上に詳しくこの問題に携わってきたのは、*Race Traitor*誌である。研究者に転じた二人の労働活動家によって1992年に創刊された同誌は、平均的な雑誌よりも広範囲の題材 — 宣言文やジャーナリストの報告、インタビュー、回想録、レビューなど — を掲載する。その指導原理は、白人性という報酬の放棄を人々に奨励することによって、アメリカにおける白人性の権力を壊すことである。この意味で、*Race Traitor*は、反人種主義者集団というよりもむしろ、反ホワイトネス集団なのである。黒人のアイデンティティがアメリカ社会でなかなか解消できないことを理解し、同誌は新たな方針を模索する。すなわち、アメリカが黒人性を無価値にしてきたことの根底にある、白人であることの特権という基礎を攻撃することである。[10]

「白人種をなくすということになると、課題は『人種主義』に反対するためにより多くの白人を味方につけることではない。その仕事をする『反人種主義者』はもう十分にいる」とイグナティエフは論じてきた。「課題となるのは、誰も白人になれないようにしようと決意したマイノリティを一堂に集めることである。」白人性は他と同様文化的なアイデンティティで、それが我々の時代にそういうものとして認められたのは当然だと主張する人々に対しては、イグナティエフは徹底的に反駁する。「白人性は文化ではない。アイルランド文化やイタリア文化、アメリカ文化というものはある — 後者は、アルバート・マレーが指摘したように、白人とイ

9 George Lipsitz, *The Possessive Investment in Whiteness: How White People Profit From Identity Politics* (Philadelphia : Temple University Press, 1998), 20. その他影響力のある研究としては、Douglas S. Massey and Nancy A. Denton, *American Apartheid : Segregation and the Making of Underclass* (Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1993) ; Thomas J. Sugrue, *The Origins of the Urban Crisis: Race and Inequality in Postwar Detroit* (Princeton : Princeton University Press, 1996) を参照。

10 Lipsitz, *The Possessive Investment in Whiteness,* 22 ; Eric Lott, "Cornel West in the Hour of Chaos : Culture and Politics in Race Matters," *Social Text* (Fall 1994) : 35 ; Noel Ignatiev and John Garvey, eds., *Race Traitor* (New York : Routledge, 1996) ; また、*Race Traitor*のウェブサイト (http://www.postfun.com/racetraitor/welcome.html) を参照。

ンディアン、黒人の文化の混合である（それにエスニックな塩を少々ふりかけて）。若者の文化やドラッグ文化、ゲイの文化はあっても、白人の文化というものは存在しない。白人性は文化とは何の関係もなく、あるのは社会的地位だけである。それは特権の反映以外の何物でもなく、それを守る以外に存在理由はない。白人性に付与された様々な特権がなければ、白人種というのは存在しないだろうし、白い肌も大きな足と同様、社会的意義を持たないだろう。」[11]

ホワイトネスを研究する歴史家たちが再発見したアメリカ社会史の解釈は、白人の特権の一貫した侵害の物語なのである。歴史家であり活動家でもあるイグナティエフは、本の中でアイルランド系移民がいかにして白人になったかという歴史を概観しているが、物語を逆転させて「独創的な挑発行為」がいかに白人種を解体する助けになり得るかを問うのである。こうして*Race Traitor*は、奴隷制廃止論者の例、とりわけウェンデル・フィリップスとジョン・ブラウンに立ち返る。同誌によると、彼らは「南部を狂乱に陥れる」ことに成功し、その結果勃発した戦争が、驚いたことに奴隷を解放したのである。重要なのは、イグナティエフが呼ぶところの「逆オレオ・クッキー」、つまり、白人性のルールを公然と破り、白人の特権を確保する諸制度 — 刑事法制度、学校、雇用ネットワークなど — を粉砕する人々を生み出すことである。「白人種の存在は、階級やジェンダー、その他どんな利害よりも人種的関心を高く位置づけようとする、白人種に分類された人々の意志次第である」と論説は断言する。「十分な数の人々が彼らの白人性を捨て去ることによって、行動の予言者としての白人性が信頼できなくなれば、白人種は衰退するだろう。」

現在に役立つ過去として、イグナティエフは、ブラウンだけでなく架空の人物にも注目する。「我々が注目する本当の例は、ハックルベリー・フィンです」と彼は私に語った。「ハックはある困難なディレンマに直面します。」すなわち、「白人的な」ことをして友人のジムを裏切るか否か、である。「そして最終的に、彼は正しい選択をする。*Race Traitor*は、その真実の瞬間について、読者に考えてもらおうとしているのです。このような状況下で、自分たちがどのように対応するのかということを。」最後にイグナティエフは、次のように希望を述べている。「白人に見える大勢の人々が白人性のルールを破れば、彼らの白人の地位は非常に危うくなり、彼らの存在は無視できなくなります。白人のルールを支持する人々が、白人に見える人全員に代わって語ることができなくなれば、白人種の存在は絶えるでしょう。」[12]

*Race Traitor*はこのように、白人リベラルたちが主張した人種の向上への支配的なアプローチに代わる、急進的な選択肢を提供している。イグナティエフとガーヴェイは、黒人を持ち上げるよりも、白人性というカテゴリーを弱体化させることを提案するのである。これは、広く知られている癌の新処方に似ている。医療の介入に抵抗するように絶えず変異する腫瘍自体を破壊するのではなく、悪性組織を供給する血管を殺し、その結果腫瘍を餓死させるという方法である。*Race Traitor*の戦略は、人種主義者を攻撃することでも右翼のヘイト・グループを追い回すことでもない。人種主義をこれほど多くの人々に有益なものとしている、イデオロギーの二項対立の体系を機能させないようにすることなのである。こうして、人種の反逆者たち（race traitors）は、表面的には戦略や戦術を命令していないように見せながら、有色人種のための闘争にいかに携わるか、という苦しい問

11 Noel Ignatiev, "The Point is Not to Interpret Whiteness But to Abolish It," paper delivered at the conference "The Making and Unmaking Whiteness," University of California, Berkeley, April 1997 (http://www.postfun.com/racetraitor/features/thepoint.html) より入手。

12 Noel Ignatiev, interview by David W. Stowe, 29 March 1996, transcript（著者所有）。また、"Treason to Whiteness is Loyalty to Humanity: An Interview with Noel Ignatiev of *Race Traitor* Magazine," *Utne Reader* (November/December 1994)：82-86を参照。

題を回避することができるのである。そして、統合か分離のどちらが黒人の正義をよりよく達成できるか、という長々と続く論争は脇に置かれる。つまり、自分たちの家の秩序を整える責任は白人に降りかかってくるのである。

人種主義と戦うために代々連邦政府の支持を求めた白人リベラルとは違って、人種の反逆者達は、国家を味方とすることをはっきりと拒否する。「今や多くの出版物や組織プログラム、研究所が、それらが『人種主義者』と呼ぶ個人や集団を割り出し、攻撃することに精力を注いでいる」とイグナティエフは述べ、南部貧困訴訟センター（Southern Poverty Law Center）を例に挙げる。「彼らは公的な国家の機関と情報を共有し協力することがある。我々はそのような傾向とは別の立場にある。我々の見解では、反体制的姿勢を伴わない『反人種主義者』の仕事はどれも国家の権威を強化しており、それこそが人種的抑圧を維持するのに最も重要な機関に他ならないのだ。」[13]

*Race Traitor*の白人性への敵意が妥協を許さないものである一方で―ホワイトネス研究者の間で好んで引用されるのは、「自分を白人だと考える限り、あなたに望みはない」というジェームス・ボールドウィンの言葉である―、他のアイデンティティに対する同誌の態度は、より寛容である。白人性を廃止するという*Race Traitor*の呼びかけから、彼らが他の人種のアイデンティティも終わらせたがっていると推理するのは間違いだろう。1997年5月、ニューヨークで*Race Traitor*後援の会議が開かれ、New Abolitionist Societyの創立が宣言されたが、歴史家ロビン・ケリーは、黒人解放運動を切り離して維持する必要性について演説した。「今晩私がここにいる理由のひとつは、白人性を廃止するからといって、自由と社会的正義のための自主的な黒人の運動を廃止するわけではないことを、明確にするためです」と彼は述べた。「中には、白人の特権、したがって人種主義を根絶することを、皮膚の色にとらわれないこと（color blindness）と混同している人がいます。（これが、新啓蒙主義左派が、マーティン・ルーサー・キングJr. を引き合いに出す新保守派の黒人やその支援者達とぎこちなく席を並べ、アファーマティヴ・アクションの解体を呼びかけている立場である。彼らは、人種やジェンダーに基づく優遇措置は、皮膚の色より人柄という中身で人々の価値を見ようとするキング牧師の夢を裏切っていると主張する。）私はもう一歩踏み込んで、社会的正義のための自主的な運動―黒人、アジア系アメリカ人、ラティーノなどによる運動―を支持したいのです。白人性の廃止が人間の解放にとって必須なのと全く同様に、黒人の解放（ひいては人種と性によって抑圧される人々のその他の運動）も、人間性の解放のために必須なのです。」[14]

言いかえれば、ケリーが提案しているのは、我々は人種主義に対して様々な手段を通じて闘争し続けなければならないが、人種の区別の概念は、あまりにも有益なのでまだ捨て去ることができないということである。白人性が特権のしるしとして権力を行使し続ける限り、それに挑戦するためには、他の人種のアイデンティティも維持、強化されなければならない。要するに、アイデンティティには良性と悪性の両方があり、我々が挑戦しなければならないのは、後者を解体しながら、前者を承認し保持することである。こうしたケリーの主張によって、アイデンティティの問題に関する左派リベラルと社会民主主義者の間の決定的な亀裂が明らかになる。おそらく、階級に基づく政治との関連においてアイデンティティ・ポリティクスの価値をめぐる論争ほどに、左派の人々同士を揺るがせた問題はこれまでなかっただろう。彼らの間では悲惨なジョークが思い出されている。紛争が

13 Ignatiev, "The Point is Not to Interpret Whiteness." また、"Aux Armes! Formez vos Bataillons!" (http://www.postfun.com/race-traitor/features/toarms.html) を参照。

14 Robin D. G. Kelley, "The Abolition of Whiteness and Black Freedom Movement," paper delivered at Race Traitor conference, New York, May 1997 (http://www.postfun.com/racetraitor/features/rkelley.html).

勃発すると直ちに、アメリカの左派は、本能的に戦闘部隊を円形に作って、お互いに射ち合いを始めるだろう、と。一方、トッド・ギトリンやリチャード・ローティのような左派リベラルの知識人は、学界の左派が社会的経済的不公正という現実の政治を避け、アメリカの労働者階級間の政治的な同盟の可能性を潰していると非難してきた。こういったことは、彼らが文化的な理論化に夢中で、抑圧という特殊な歴史を共有する集団ごとに、世界を切り分けることに取りつかれているために起こっているという。こうした批判に対して、ケリーやリプシッツのような批評家は、すべてを経済に還元する概念に基づく階級政治について、極度に単純化された見解を助長するものとして、これらの批判を非難してきた。なぜなら、この見解からは、アメリカでは人々が主に人種とジェンダーのカテゴリーを通じて社会的抑圧を経験しているという実態が見えてこないからである。中には、アイデンティティに関する左派の批評家を、「左派の服を着た新保守派の白人連中」が、左派の政治的動員を統制、支配する権力願望を覆い隠すために、階級というユートピア的レトリックを用いている、と非難する人さえいるのだ。[15]

論争の悪意ある言葉の多くは、ポリティカル・コレクトネス（PC）にまつわる周知の議論に類似していることと、両陣営が、相手側をより大きなPC論争における過激な擁護者と見なす傾向にあることから生じている。言いかえれば、アイデンティティ・ポリティクスを批判する左派リベラルたちは、リン・チェニーやジョージ・ウィルのような新保守派とひとまとめにされているのだ。彼らは、最近の記憶の中で最も不誠実な煽動家の一員だと直ちに認識する人々と同一視されていることへの憤りから、猛然と応酬しているのである。アイデンティティ・ポリティクスの擁護者も同様にひどく怒っている。というのも、彼らは、資金力のある共和党右派が同じ左派を装って行う攻撃から、自分たちの立場を守らなければならないからである。この種の疑念があまりにも表面化しやすいということは、アメリカの左派が低迷していることの明白な証しである。

IV. アイデンティティ・ポリティクスとセンサスをめぐる論争

アイデンティティ・ポリティクスをめぐる象牙の塔の論争が、PCにまつわるより大きな議論からエネルギーを引き出しているのと全く同様に、ごく最近まで大学の左派知識人の間だけで勢力を発揮していた社会的構築物としての人種という考え方も、今では公的政策の範囲に広がってきている。この論争が最もよく知られ激しく議論されたのは、もちろん、アファーマティヴ・アクションにおいてだが、白人性に関する先述の論考により関係するのは、アメリカのセンサスの再編成に関する論争だろう。人種の差異のカテゴリーは、もちろんアメリカの歴史において長年実施されてきてはいるが、アメリカの公的な場で用いられる特別なカテゴリーの歴史は比較的短かく、しかも一貫したものではない。すなわち、1970年代半ば、連邦の予算管理局（Office of Management and Budget、以下OMB）が、現在のエスニシティと人種の「ペンタゴン（五角形）」を提案したときにさかのぼることができる。そのカテゴリーとは、(1)ネイティヴ・アメリカンおよびエスキモー、(2)アジア系および太平洋諸島系、(3)白人、(4)黒人、(5)ヒスパニックである。この5つのカテゴリーは、当時支配的であった人種のカテゴリー

15 Todd Gitlin, *The Twilight of Common Dreams: Why America Is Wracked by Culture Wars* (New York: Owl Books, 1996); Richard Rorty, *Achieving Our Country: Leftist Thought in Twentieth-Century America* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1998); Robin D. G. Kelley, *Yo' Mama's Disfunktional!: Fighting the Culture Wars in Urban America* (Boston: Beacon, 1997); Lipsitz, *The Possessive Investment in Whiteness.* アイデンティティ・ポリティクスをめぐる左派の論争の簡潔な例としては、Eric Alterman, "Making One and One Equal Two," *Nation,* 25 May 1998, 10; "Exchange: Are '2 Left Poles' Like 2 Left Feet?" *Nation,* 20 July 1998, 2, 24を参照。

―コーカソイド、ニグロイド、モンゴロイド―から離れ、さらに、一人種と実質的に同等のものとして、主として母語に基づいた「ヒスパニック」という、あいまいなエスニック・カテゴリーを具象化している。これらのカテゴリーには、アファーマティヴ・アクションや公民権の諸政策を履行するのに必要な統計収集を容易にするという、実用的で事実有益な目的があった。しかし1980年代の多文化主義の隆盛によって、それは、アメリカの人口の「自然な」描写として、その有用性を発揮したのである。

おそらくデイヴィッド・ホリンジャーは、この5つのカテゴリーに関して最も徹底的な批判を展開してきた人物だろう。彼はこのカテゴリーの恣意的で矛盾した起源を論証し、それが現代の多文化主義モデルを歪めてきていると指摘する。さらに彼は、人種、エスニシティの差異を、人々に忠誠を強いる固定したカテゴリーと考えるより、宗教信仰のような好みの問題として考えることを、控えめに提唱する。作家アレックス・ヘイリーは、強制的な帰属という現行の制度下ではアフリカに自分のルーツをたどらなければならなかったが、ホリンジャーが想像する世界では、彼が自分の何人かの先祖の祖国であるアイルランドにルーツをたどることも、同様に自由なのである。[16]

2年前、このカテゴリーをめぐる論争が、学界からアメリカの国民に広がった。数年に及ぶ調査の後、OMBは現行のセンサス様式にある変更を加えるよう提言した。5つの人種カテゴリーないし「その他」から一つを選択させるよりも、書式のカテゴリー項目から、一つ以上選ぶことも許容するという提案であった。例えば、中国人の母親とナイジェリア人の父親を持つ人なら、「アジア系」と「黒人」の両方を選択できるようになる。OMBの提案は、1997年10月、クリントン政権により承認された。

しかし当初は、まだ別の選択肢を大いに推す声があった。「多人種（Multiracial）」という新たなカテゴリーを、現存する5つの人種、エスニシティのカテゴリーに加えるというものである。この提案は、社会的構築物としての人種、白人性の廃止、あるいは人種的正義のためのあらゆる運動、いずれの立場とも関係のない多くの人々から支持を得た。例えば、前下院議長のニュート・ギングリッチは次のように述べた。「アメリカはあまりにも大きく、多様なので、我々全員を4つ［原文通り］の厳密な人種カテゴリーに分類することはできない。政府は、アメリカの人種のアイデンティティを正確には反映していない、人為的なカテゴリーの選択を、我々に強制する決定をしてきた。タイガー・ウッズのような何百万人ものアメリカ人が……国勢調査局の分断的で不的確なラベルを超えて行動してきている。我々はカラーの世界に暮らしているのに、政府は引き続き我々を黒人か白人としてのみ見なすのだ。政府は人種の区分の継続をやめる時期に来ている。今こそ個人を個人として扱う時である。」[17] 自らを「カブリネイジャン（Cablinasian）」（コケイジャン、黒人、ネイティヴ・アメリカン、アジアの混合）と表現するゴルフ界の有名人タイガー・ウッズは、ギングリッチやその他の多人種カテゴリー賛同者にとって、ある種の広告塔として役立ってきている。

この論争では何が問題になっていたのだろう？なぜ「多人種主義」の支持者が、一つ以上のカテゴリー選択を望む人々と争ったのだろうか？ある意味で、この論争は、混合した人種を先祖に持つアメリカ人が、新たに指定された白人のカテゴリーに割り当てられるのか、それとも、有色人種としてある種のアイデンティティ

16 David A. Hollinger, *Postethnic America: Beyond Multiculturalism* (New York: Basic Books, 1995). アメリカのセンサスにおける人種カテゴリー発展の簡潔な歴史については、Lawrence Wright, "One Drop of Blood," *The New Yorker,* 25 July 1994, 46-55を参照。

17 "Testimony of Speaker Newt Gingrich Submitted to the House Subcommittee on Government Management, Information, and Technology," Hearing on Multiracial Identification, 25 July 1997 (http://speakernews.house.gov/racecens.html).

意識を保持するのか、ということをめぐるものだったのだ。これまでの議論では、実用的なものとイデオロギー的なものが興味深く融合していた。両陣営とも、自分たちの提案は現在の恣意的な人種・エスニシティのカテゴリーを改善し、人種のアイデンティティの流動性により適合したものになるだろうと考えた。当時下院議長だったギングリッチにとっては、論争は、人種のアイデンティティより国民のアイデンティティを奨励する格好の場となった。「多彩なエスニシティと人種にあふれた国では、単にアメリカ人であることだけで十分だ。」しかし複数選択案の賛同者は、人種とエスニシティに関する歴史的データへの貴重なつながりが失われてしまうことを指摘した。このデータは、アファーマティヴ・アクションや選挙区の議員数割り当てから、人種に関連した健康状態の調査に至るまで、すべてのことに役立っていたのである。多人種カテゴリーの支持者は、反対者が恐れているのは、新しいカテゴリーによって「公式の黒人」の総数が少なくなることだと告発した。なぜなら、one-dropルール（黒人の血が一滴でも入っていれば黒人と見なすという法則）に従っていれば、アフリカに先祖を持つ者なら誰でも黒人に分類されるからである。これに対して複数選択案の支持者は、人種カテゴリーの使用を終わらせても差別はなくならないと反論し、差別を識別しそれに追従する行為を公民権法で監視する政府の力だけが、差別を終わらせ得ると述べた。要するに、歴史的に不利益をこうむってきたマイノリティは、政治的権力を失うということだろう。国勢調査局の調査によれば、ごく少数、おそらく現在黒人と分類されている人々のわずか1パーセントが、新しい多人種カテゴリーの影響を受けるだろうとの指摘もあった。[18]

しかしながら、複数選択案の採用決定は、新たな論争を巻き起こしている。さらにこの論争は、アメリカ人の人種観に、ある論理的崩壊の前兆をもたらすことになるかもしれない。国勢調査局によって準備された選択肢の用紙は、新システムの下で、賛成派と反対派にどのように数を記録するかという問題を出した。「総分類」のアプローチでは、国民は、自分が挙げる様々な人種の組み合わせに該当するカテゴリーのどれか一つに納められる。組み合わせが多様なために、あいにくアメリカは63もの公認の人種を得ることになるだろう。「すべて含む」アプローチでは、当局は、選択される人種の数に応じて、国民を複数のカテゴリーに割り当てなければならない。困ったことに、結果得られる分類は、人口の100パーセント以上の合計となる。また「略式」アプローチでは、人種の混ざった人々は、2000年のセンサスで認められる6つの人種カテゴリーの一つに置かれることになるだろう。その分類は、無作為に行われるかもしれないし、近隣の人種構成に基づいて行われるかもしれない。あるいは全人口の総比率を用いることもあり得る。最後に、複数のグループを選ぶ人は、複数のカテゴリーに部分勘定されることもあるだろう。つまり、白人とアジア人の混血の家系の人なら、各カテゴリーに0.5ずつ集計されることになる。さらに新たな党派論争が、クリントン政権の提案によって発生した。それは、統計サンプルを用いて、郵便質問表という旧システムでこれまで実際より少なく数えられた人々を測定しようとする提案である。しかしこの案は下院で否決され、1998年連邦裁判所で却下された。[19]

V. まとめ

以上述べてきたことはすべて、確かに、白人であることの奇妙な意味をいくらか示唆している。あるいはむしろ、歴史的に人種の差異があ

18 "Not an 'Other,'" roundtable discussion from *Online Newshour,* 16 July 1997 (http://www.pbs.org/newshour/bb/fedagencies/july-dec97/census_7-16.html).

19 "Census Bureau Grapples with Racial Categories," *Orange County Register,* 30 June 1998, a11; "President Urges Use of Sampling in 2000 Census," *Sacramento Bee,* 3 June 1998, A8.

まりにも重要な問題となってきた国で、人種によって分類されることの奇妙な意味を示していると言えようか。白人であることが長年にわたって非常に多くの特権を供給してきた国家では、あらゆる政治的立場の人々が、白人というカテゴリーに置かれることを避けるため、今や様々な方法で奮闘している。これはある意味で皮肉なことである。センサスが予言する未来と、ホワイトネス研究の歴史が我々に期待させる未来は、根本的には同じであると当然考えられる。すなわち、次の世紀に支配的となる人種集団は、ベージュかオフホワイトだろう。これは、白人、アジア系、ラティーノ間の結婚率が高いことから出てくる色である。こうして、次の世紀のアメリカで重要となる境界線は、白人と非白人の間ではなく、黒人と非黒人、もしくは、却下されたセンサスの用語を用いれば、多人種の間に引かれるかもしれない。

しかしながら、このオフホワイトのマジョリティから、黒人が多かれ少なかれ排斥され続けるだろうと推測するのはもっともなことである。この新たなマジョリティは、黒人から距離を置き続けることでアメリカン・ドリームへの権利を追求し、アメリカにおける白人性という長年の勝者の歴史に新たに名を連ねることになるだろう。このように、「白人」と「有色人種」というカテゴリーは、現在よりも多様な肌の色と構成員を有することになるだろうが、おそらく大体においては同様の社会的結果を招くに違いない。[20] したがって、予測しうる未来を考えると、白人という描写にふさわしい人々が人口に占める比率の中で減少する時代になっても、白人であることの持つ奇妙な意味によって、アメリカ社会は争いと抵抗を受け続けることだろう。

---

20 Lind, “The Beige and the Black,” 38-45.